

		6	5	4	3		
⑥	①	①	①	①	①	問六	問五
志	旧交	ア	イ	オ	主語	イ	ス
61	56	53	50	(読解)	述語	42	ロ
⑦	②	②	②	ア	(読解)	問七	
似	検温	イ	ア	③	主語	ウ	
62	57	54	51	47	(読解)	問八	.
⑧	③	③	③	イ	主語	イ	リ
織	農耕	エ	エ	(読解)	述語	問九	
63	58	55	52	オ	(読解)	ア	ダ
⑨	④			③	主語	問十	
増	欠航			×	(読解)	ウ	41
64	59			48	(読解)	46	
⑩	⑤			キ	(読解)		
限	酸素			49			
65	60						

(配点)

{ ① 各5点
 ②〔問二〕各2点、〔問四〕8点、他各5点 } 計150点
 ③④⑤⑥各2点

小学五年

国語

解答と解説

1

問一	イ	21
問二	ウ	22
問三	ア	23
問四	1	24
	エ	25
	2	26
問五	ウ	27
	エ	28

問六	世界への扉	27
問七	イ	28
問八	ア	29

問九	図書館	30
問十	ウ	31
問十一	ウ	32

2

問一	ア	(完巻)
問二	ウ	
	エ	33
問三	ア	34
	ウ	35
問四	速読	36

問四			
に	の	じ	読
意	本	っ	書
味	の	く	は
が	魅	り	読
あ	力	時	ん
る	を	間	だ
と	十	を	と
い	分	か	い
う	に	け	う
こ	堪	て	事
と	能	読	実
。	す	ん	で
	る	で	は
	こ	、	な
	と	そ	く

37
38
39
40

【解説】

1 角田光代の『さがしもの』所収「ミツザワ書店」(新潮社)から出題しました。主人公の「ぼく」やミツザワ書店の店主の孫である女の人の気持ちを、しぐさや表情から丁寧に読みとっていきましょう。

問一 A2 知識

a 「道楽」は「食い道楽」(美味しいものを食べたり料理を作ったりすることに熱中する人)などの言葉があるように、それを趣味として楽しむことです。おばあさんが本屋の経営よりも本を読むことに集中していたことから類推できません。

b 「拙い」は「幼い子の拙い文字」、「拙いが人の心を打つ文章」などのように使う言葉です。「ぎこちない」、「へたな」などの意味です。

問二 A2 関係づけ 知識

副詞の空欄補充の問題です。「待っている」にかかる言葉ですから、AにはE以外の選択肢なら入りそうです。責められる覚悟を決め自分の罪を告白したあとの場面だということも考えましょう。Bの部分は、直後の「思いついたようにつけ足した」という言葉がヒントになります。不意に、ふと、などの言葉が入ります。

問三 B1 理由 比較

線①「頬をはられたような気持ち」とありますが「頬をはる」とは平手打ち(ビンタ)をするということです。こ

こから、「ぼく」にとつて、女の人から告げられたおばあさんの死はおどろきと、衝撃だったことが読みとれます。したがって答えはAです。I「さびしさを必死でこらえて」、U「謝罪をつたえられなかったことで落ち込んでいる」などは、おばあさんの死をある程度受け入れられてから生まれてくる感情です。E「女の人のとがめるような口調」とありますが、本文中では「笑みを浮かべたまま」「静かな口調で」とありますから不適切です。

問四

B1 具体化 比較

E「もうすぐ万引きしたことを許してもらえる」は本文中には示されていないことが書かれている選択肢です。ですから答えはEです。「時計の音が大きく聞こえる」という表現は、しんと静まりかえっていることや、何かことがおこつて、その空間だけ時間がゆつくりと流れているように感じられること、人間がどうあがこうと時間はたえず淡々とすすんでいくことを表現する際によく使われます。この場合は「ぼく」がミツザワ書店の閉店を聞き、動揺し言葉を返せなくなっている、空白の時間を表現しています。そして、罪悪感でいたたまれなくなったぼくが、時間がなかなか流れないように感じていることも読み取れます。またぼくがうしろめたさからミツザワ書店を避けているうちに、おばあさんは亡くなり、ミツザワ書店は閉店してしまつたというように、時は人間の思ひとは関係なく淡々と流れ、二度と戻つてこないものだということを「ぼく」が痛感していることも表現されているとも考えられます。

2

B1 具体化 比較

——線②の直前に「何か、とてつもない失敗をしかしたような気になった。自分は凶悪事件きょうあくじけんの加害者で、警察けいさつにいかず被害者の家に自首じゆうしてきたような」とあることから、「ぼく」が自分の罪の大きさに気づき動揺どうごしていることを読みとりましょう。ですから答えはウです。万引きをした「ぼく」もあの意味ミツザワ書店を閉店に追い込んだ一人です。その上「ぼく」がもっと早くに謝罪しやざいしにきていれば、ミツザワ書店の閉店を、店主の孫である女の人から聞くのではなく、自分で知ることができたはずだったのに、何年もたつてからのこのこと訪ねて行って、結局女の人の口からそれを言わせてしまった——これらの罪悪感でいっぱいになっているのでしよう。エ「定期的に本を買っていけば」は本文中に示されていません。

問五

B1 置換 比較

指示語の問題ですから直前の内容を確認かくにんしましょう。——線③の直後の「返しにくる人も見つけたことあるの」は指示語の内容である「何人か、つかまえたのよ、本泥棒ほんどろぼう」と対の表現になっていることにも注意しましょう。

問六

B1 具体化

おばあさんの人となりくわたりが詳しく描かれているのは、祖母の思ひ出を語る女の人のセリフの部分ですから、そこを読み進めましょう。「祖母にとつて、本つてというのは、世界への扉かぢだったのかもしれないですよね」とあります。

問七

B1 具体化 比較

女の人が「ぼく」におばあさんの人となりや思ひ出話をしていることに注目ちゅうもくしましょう。「本の表紙を、そつと撫なでさすりながら」という表現から、女の人の、本が大好きだったおばあさんへの思ひが伝わります。ア「小説を書いてもらいたい」ウ「反省を促うながそうとしている」は本文からは読み取れません。エ女の人が「ミツザワ書店の雰囲気ふんいきが：変わつてしまった」ことを「申し訳なく思つている」とは読み取れません。

問八

B1 理由 比較

——線⑥直前の「そのかわり」の内容を明らかにしましょう。すると、——線⑥を含む一文は、その「子どものころのぼくにとつて、ミツザワ書店こそ世界への扉だった」と女の人に伝える）かわりに、「…自分の単行本を…そつと置いた」と理解できます。自分の本を置いたのは、ミツザワ書店のおかげで、本のおもしろさに目覚め、作家という道を見つけたらということに対する感謝の気持ちのあらわれだと考えられます。イ「店の経営のたし」、エ「盗みぬすのこをむしろ喜んでくれる」などの部分が不適切です。ウ「ほつとする」では、罪を責められなくて一安心した、という意味になってしまふので、これも不適切です。

問九

B1 関係づけ

⑦は、今は閉じているミツザワ書店を「開放」するところとできる場所、「この町の人を読みたい本を好き勝手に持つていって、気が向いたら返してくれるような、そういう場所」です。また、「ぼく」も「そうなつてほしいと、じつはさつ

き思っていたんです」と言っていることから、二人の会話の中に答えがあると想定できます。

問十 B1 具体化 比較

——線⑧の「ありがとうございました」の理由を、女の方は「本、お買いあげいだいて」と言っています。「ぼく」を万引き犯としてではなく、十一年かけて代金を持つてきたお客さんとして見ていますよ、という冗談を言っているわけです。

問十一 B1 具体化 比較

——線⑨の直後に「書き初めに向かう子どものような気分」とあることに注目しましょう。「書き初めに向かう子ども」とありますから、難しいことなど考えず、自分の夢をかねえるための目標をのびのび書き記す、というようなイメージです。ここから答えはウとなります。ア「決死の覚悟」、エ「ひそかな野望」というのは「書き初めに向かう子ども」とはイメージがありません。イ「全てうまくいく」とありますが、——線⑨中に「不釣り合いでも…絶望しても」とありますので、この言葉も不適切です。

2 平野啓一郎 本の読み方 スロー・リーディングの実践

HP(研究所)から出題しました。本を読むことを旅をするところに喩えて、スロー・リーディングと速読の違いを説明するところから本文はスタートします。スロー・リーディングの方法の一つとして、「書き手の視点で読む」ということを推奨し、それによって得られる効果が説明されています。難しい

表現もままあり、とつつきにくく感じられるかもしれませんが、わかりやすくとえたり、具体例を示したりしながら論が展開されていくので、そこをヒントにしながら著者の意見を丁寧に読みとつていきましょう。

問一 A2 関係づけ 知識

文と文を接続する言葉は、前後の文の関係をよく確認して入れましょう。Aの前では、「こうした伏線」を「見落としてしまったとしても…小説がそこから先へは進めない」ということには…ならない」とあり、後で「速読の際には、しばしば見落とされてしまう」とあるので、ここには順接の「だから」が入ります。Bの前では「速読の際には」小説の「こうした伏線」は「見落とされる」ことが示されています。後で「書き手の仕掛けや工夫を見落とさない」というところから始めなければならない」とあります。「書き手の仕掛けや工夫」とは、「こうした伏線」のことですね。ですから、ここには逆接の「しかし」が入ります。

問二 A2 知識 関係づけ

その語の意味が分からなくても前後から類推するくせをつきましょう。a「忙しい旅行者」と対比されているのは、直後の「じっくり時間をかけて滞在した人」です。ですから、「じっくり時間をかける」の逆の意味であるウの「せかせかしている」が正解です。b昔は、その仕事をつとめる(奉公する)年数を決められた上で、雇われるようになっていました。年季とは、その奉公する約束の年限のことです。そこから「年季が入る」とは「長い年月をかけて経験を積んだ」と

ということがあげられています。この内容と一致するものはイです。ア「最も重要なできごとが起こる前に」、ウ「結末に結び付く重要なこと」、エ「多く読んでいる人でないとなかなか気づくことのできない」の部分がそれぞれ不適切です。

問九

B1 具体化 比較

「埋蔵金」とは、どこかに埋められて隠された財宝のことです。——線⑦を含む一文は「その多くは、実はほとんどどの読者に気づかれないうまま、埋蔵金のように（！）今も小説の至るところに眠っているのである。」というものです。「その多く」とは三島由紀夫の技巧、細かな仕掛けのことです。ですから、彼の小説に仕掛けられた技巧や細かな仕掛けが、「ほとんどどの読者に気づかれないうまま：今も小説の至るところに眠っている」ということを、「埋蔵金」にたとえているとわかります。

問十

B1 関係づけ

筆者は、「私自身も：小説を書くときには：実は些細な点にまでいろいろな工夫を施している」としたうえで空欄⑧直前に「スロー・リーディングしてもらえれば、十分に理解できるはずの事柄が読み落とされてしまっているときには、やはり寂しい気持ちになる。」としています。そこから、書き手は読者に「スロー・リーディングしてもらおうことを前提に、「些細な点にまでいろいろな工夫を施し」て作品をあげていることが分かります。

3

A2 知識

主語と述語の問題です。述語を見つけてから、主語の「誰が」「何が」にあたるものをさがしましょう。

- ① 述語「これかい」↓「何が」これなのか↓主語「眼鏡は」
- ② 述語「そまるだろう」↓「何が」そまるのか↓主語「もみじも」
- ③ 述語「行きました」↓「誰が」行ったのか↓主語は示されていない

4

A1 知識

「色」に関係することはの問題です。

- ① 白日のもとにさらす：かくれていたことを、みんなの前であきらかにする。白日とは明るい太陽のこと。
- ② 青二才：年が若く、まだ一人前になっていない男。
- ③ 大黒柱：家やある集団で中心になって働く大事な人。

5

A1 知識

外来語の問題です。本や新聞などで外来語を見かけたらチエックするようにしましょう。

- ② 規則＝ルール、助言＝アドバイス、などは押さえておきましよう。